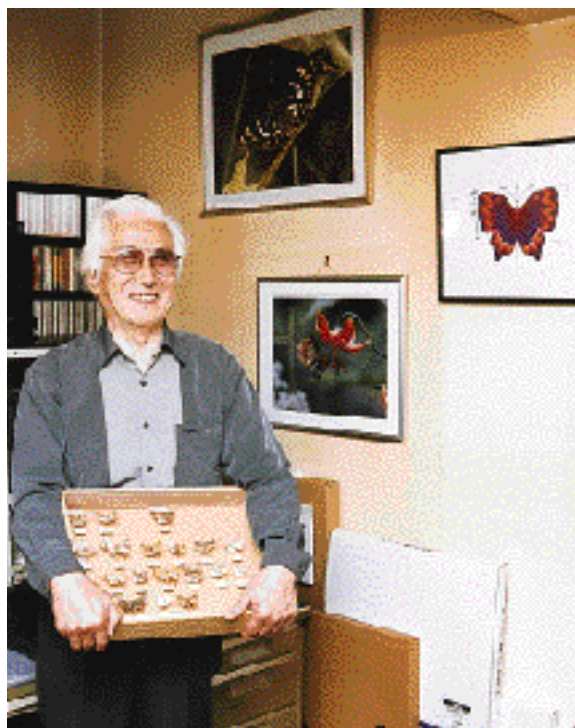




子どものころも今も
虫を探しているときの気持ちは
少しも変わりません



HITO

早川 和彦さん (昆虫採集家)

上広瀬に「自宅のある早川さんは子どものころから虫が大好きで、今から13年程前、定年退職をきつかけに本格的に昆虫採集を始めました。山梨県早川町の海拔800メートルにある空き家を借り、毎年4〜10月はひたすら昆虫採集を続ける毎日です。それまでも南アルプス周辺ではよく採集をしていましたが、周りを囲む大自然を目の当たりにしたとき、即座に借りることを決めてしまったそうです。

そんな早川さんが追い求めているのは、蛾「昆虫採集と言つと蝶やカブトムシなどを思い浮かべますが、なぜ蛾なのですか。」と、よく質問されるそうですが、「日本には蝶の種類が少なく、その実体は99・9%まで解明されています。でも、蛾は蝶に比べて20倍ほど種類があり、そ

早川さんが手に持っているのは、昨年採集された奇形の蛾の標本。「こうしたことから、私の疑問は“昆虫と大気汚染”、すなわち環境問題へと移っていきました。『なぜ? どうして?』という気持ちをいつも忘れないで欲しいですね。それが、学問につながっていくんです。」



写真は早川さんが「崖っぷちの木に体を縛り付けて、命がけで撮った」という国蝶のオオムラサキ。

の分布も生態も不明なことが多いのです。だから、見たこともないような蛾を見つけれられる可能性が高いんです。それに蛾と蝶は人間が分類学上で分けただけで、実際は同じ分野にあるし、蝶よりも美しい蛾もいますしね。」と本当に蛾に惚れ込んでいる様子がよく分かります。そして、「昨年は奇形の蛾が多数発生しました。これがどんな原因でそうだったのか、大気汚染であろうかと、仮説をたてることはできても本格的に証明することはできません。けれど、私がたくさん蛾を集めた中で奇形を見つけたことがきっかけとなって『昆虫と環境』という誰も手を染めたことのない分野のデータを出せる限り集め、誰かがこうした環境問題を研究してくれるようになったら...』と思いつながら、一生懸命採集を続けているんです。」と語ります。

大自然の中で毎日昆虫を見つめ続ける早川さん。生涯現役であることを誓つように今日も採集をしています。

植物・生き物 / しよくぶつ・いきもの

さやまの生態系
ヨタカ
(ヨタカ目ヨタカ科)

Vol 51

全長約29cm。夏鳥として東南アジアから渡来し、低山の明るい林やその周辺に生息する、夜行性の鳥です。全体に褐色の不規則な模様で、木に留まるときは枝と平行に留まるので、木のこぶのように見え、見つめることは困難です。飛ぶときにもあまり羽音をたてず、飛びながら大きな口を開けて昆虫を捕らえます。夜間「キョッキョッキョ」とテンポの早い一本調子で続けて鳴きます。林の中やその周辺の地面に直接卵を産んで雛を育てます。「ヨタカ」という名前は、夜行性でタカに似ていることに由来しています。



撮影：県生態系保護協会狭山支部
矢内昭夫さん(水野)